

2023 Vol.22

GLOCAL



Forum

- 「文学館」をめぐって
— 私が訪れた「文学館」 — 杉本 和弘
- 文系の逆襲 石井 洋二郎

Notes

- 中国人学習者における複合動詞の習得研究 栞 啓鵬
- サウンドスケープデザイン支援を目指した音資源
デジタルアーカイビングシステムの開発 坂本 董
- ナラティブ・メディシンにおける英語文学作品の精読活動
— その解釈作業と期待される教育効果について —
原 由美子

News & Record

- 第17回「院生の力」を開催
- 第18回教員研究会を開催

GLOCAL

GLOCALは、GLOBALとLOCALを組み合わせた造語であり、地球規模でのグローバルと身近なローカルを、ともに等しく重視する考え方を意味しています。



ごあいさつ

中部大学大学院国際人間学研究科の活動レポート、GLOCAL Vol. 22 をお届けいたします。

本研究科は、1991年に国際関係学部を基礎に創設された国際関係学研究科国際関係学専攻をルーツとして発足しました。その後、1998年に創設された人文学部を基礎とする2専攻（言語文化専攻、心理学専攻）が2004年に合流し、名称も「国際人間学研究科」に変更されました。さらに2008年には歴史学・地理学専攻が加わり、4専攻体制となって現在に至っています。

長引くパンデミックに、ロシアによるウクライナ侵攻、世界に目を向けると、これまで予想もしなかったことが現実にも目の前で起きています。一方国内では、少子高齢化の進行に伴い労働力人口が減少するなかで、リーマンショックや東日本大震災などの影響を受けつつも外国人労働者数は大きく増加しています。また、新型コロナウイルス感染症への対応が緩和され、観光業界では訪日外国人観光客数の再増加に期待が寄せられています。このように日本社会は、さまざまな社会・経済情勢の影響を受けながらも、それ自体が国際的な「場」として開かれようとしており、国や地域も多文化共生社会の実現に向けてさまざまな施策に取り組んでいます。

グローバル化がますます進展するなか、異文化や国際社会への理解を深め、国際的な視野をもって世界で活躍することができる人材が求められています。と同時に、多文化共生社会の実現のためには、自分が暮らすローカルな地域に目を向け、多様な人間や文化への深い関心が必要とされます。本研究科はそうした認識に基づいて、グローバルな視点とローカルな視点の両者を軸とする「グローカル」な教育研究を理念として掲げています。

本号には、教員2名の研究発表と2022年度に入学した大学院生3名の研究報告のほか、本研究科の活動報告として教員・院生による研究会の報告が収められています。人文社会科学の幅広い分野を研究領域とする本研究科の特徴が表れた内容であり、まさに本研究科が標榜する「グローカル」な視野に基づいた研究の一端をうかがわせるものであると言えるでしょう。

このように教員と院生が同じ誌面で相互の研究内容を共有する機会はきわめて貴重なものであり、研究科としてもますます本誌の充実を図って参りたいと思います。小誌を通して、本研究科の日頃の活動の一端をご理解いただければ幸いに存じます。

2023年2月24日

大塚 俊幸（中部大学大学院国際人間学研究科長）





Profile

国際人間学研究科 言語文化専攻 教授

杉本 和弘 (SUGIMOTO Kazuhiro)

名古屋大学文学部卒業。専門は日本近代文学、三島由紀夫、安岡章太郎の作品を中心に研究。共著に『三島由紀夫の表現』（勉誠出版）、主な論文に「『仮面の告白』覚書一記述する〈私〉を視座として」（『名古屋近代文学研究』6）、「『ガラスの靴』の時空—「シンデレラ」の影」（『昭和文学研究』34）など。



「文学館」をめぐって —私が訪れた「文学館」—



はじめに

10年ほど前から全国各地の様々な「文学館」を訪ねるようになった。「文学館」の大半が近代文学に関わることもあって、資料収集等、研究活動の一端である場合も多いが、最近では、各地の「文学館」に出かけること、それぞれの企画展や常設展を観覧すること自体も目的になった。小稿では、これまでに私が訪れた「文学館」のいくつかを紹介しながら、「文学館」の特色や魅力について述べてみたい。

「文学館」とは

「文学館」を厳密に定義づけることは難しい。施設の名称からして、『文学館』『記念館』『記念文学館』『文学資料館』『文芸館』『文庫』等々、まちまちである。また、その規模も活動状況も様々である。とりあえずは、「文学」に関わる資料等を収集・展示している施設」というほどに捉えておく。全国文学館協議会HPに拠れば、全国で「文学館」とされている施設は、大小合わせて663、このうち、全国文学館協議会会員館が107ということである。運営形態も様々で、比較的規模の大きな「文学館」は、都道府県や市町村等、地方自治体が設置、運営するものが多い。「文学館」と括弧つきで表記してきたのは上記の事情による。

では、「文学館」の主な活動内容・機能はどのようなものであろうか。標準的な「文学館」（全国文学館協議会会員館の大半はそれ

に当たるであろう）には、大きく次の3つの機能があると考えられる。

- ① 文学に関わる資料の収集、保存（肉筆原稿、初出誌、初版本、日記、書簡、創作ノートなど）
- ② 市民への啓蒙的活動（常設展示、企画展、講演会、講座、各種刊行物の発行など）
- ③ ゆかりの文学者の顕彰

すべての「文学館」が上記の活動を満遍なく行っているわけではなく、それぞれの「文学館」の設置の趣旨や事情によって重点の置き方は異なるし、それがまた、各施設の特色、個性にもなっている。ただ、③の文学者の顕彰については、強弱の違いはあれ、すべての「文学館」が果たしている機能であろう。

また、「文学館」の特色や魅力を成り立たせている条件として、私見では以下の3つの要素が重要であると考えられる。

- ① コンテンツ（収蔵物や常設展示・企画展等の内容）
- ② 建物（建物の外観や構造、内部の設備等）
- ③ 立地（どのような地域のどんな場所にあるか）

以下では、上記の観点にも留意しながら、いくつかの「文学館」を紹介していきたい。

私が訪れた魅力ある「文学館」

「文学館」は、概ね、文学者の個人名が冠せられた施設、都道府県や市町村名あるいは設置する組織名が冠せられた施設に大別される。個人名が冠せられた「文学館」は、一部の例外を除いて、ほとんどが出身地や居住地、

作品の舞台となった地域等、当該作家と縁が深い地域に設置されている。一方、地域名や組織名が冠せられた「文学館」は、当該地域・組織にゆかりのある文学者や作品の関係資料を収集、展示していると言える。

個人名が冠せられている「文学館」のうち、最も多いのが出身地に設置されたものである。

中でも、生家や生家跡に置かれた「文学館」は、時代的な変化はあれ、当該作家が生育した風土に触れることもできる。太宰治の生家がそのまま「文学館」となっている『斜陽館（太宰治記念館）』（青森県五所川原市金木町）は、資料よりも、建物そのものが観覧対象となっており、観光ルートにも入っていて参観者が多い。福岡県柳川市の『北原白秋生家・記念館』も『斜陽館』ほどではないにしても、観光客の観覧が多い「文学館」である。

生家が隣接する『森鷗外記念館』は、歴史的な建築物や史跡が多い島根県津和野町でも中心的な文化施設の一つである。鷗外関係資料も充実しており、企画展や講演会等の活動も活発である。津和野川に近い生家の対岸には親戚の哲学者西周旧宅があり、周辺には鷗外も通った藩校「養老館」、森家累代の墓がある永明寺もある。永明寺には、三鷹の禅林寺の鷗外の墓から1953年に分骨された墓がある。なお、東京都文京区には、鷗外が亡くなるまでの約30年間を過ごした「観潮楼」の跡地に『文京区立森鷗外記念館』が設置されている。

文学者が一定期間在住した地にある「文学館」としては、兵庫県芦屋市に『芦屋市谷崎

潤一郎記念館』がある。東京生まれの谷崎は1923年の関東大震災後、阪神間に住むようになり、1944年に空襲を避けて岡山県の勝山に疎開するまで、転居を繰り返しながらもこの地域に住んだ。『細雪』（1943～48）をはじめ関西を舞台にした作品も多い。館には1万点を超える資料が収蔵されており、それらの一部が展示、公開されている。なお、神戸市東灘区には谷崎が1936年から1944年まで住んだ「倚松庵（いしょうあん）」が現存し、公開されている。

『石坂洋次郎記念文学館』は、青森県弘前市生まれの石坂が1926年から1939年まで居住した秋田県横手市にある。石坂はこの間、秋田県立横手高等女学校、同横手中学校に勤務しながら、『麦死なず』（1936）『若い人』（1937）を発表、その成功によって上京、作家生活に専念することになる。横手時代の教師経験は、代表作の一つである『青い山脈』（1947）はじめ、多くの作品の土台になっている。なお、『弘前市立郷土文学館』にも「石坂洋次郎記念室」があり、石坂が愛用していた品々や各種資料が展示されている。

作品の舞台となった地にある「文学館」としては、長崎市東出津町（旧長崎県外海町）にある『遠藤周作文学館』（写真参照）がある。遠藤の代表作『沈黙』（1966）の舞台となった地にあり、館からは東シナ海に通じる五島灘を望むことができる。また、周辺の地域は教会堂が点在しており、「クリシタンの里」とも呼ばれている。館はエントランスホールにステンドグラスが取り付けられているなど、教会をイメージした造りとなっている。所蔵する資料は、遠藤家から寄贈、寄託されたものをはじめ3万点にも及び、展示や研究利用に供されている。



遠藤周作文学館（エントランスホール）

「文学館」には、その建物が魅力的なものも多い。これまでに言及した、『森鷗外記念館』『芦屋市谷崎潤一郎記念館』や『遠藤周作文学館』も意匠を凝らした建物であるが、安藤忠雄設計の『姫路文学館』や『坂の上の雲ミュージアム』（松山市）も周囲の景観に寄り添いながらも、現代風な外観が、その存在を主張しているような建物である。他方、その地にある由緒ある建物を再利用する形で、その地域の歴史の中にとけ込みながら、「文学館」として活用されているのが、1921年築の旧第一銀行函館支店（函館市景観形成指定建築物）に入っている『函館市文学館』、1936年築の旧前田侯爵家別邸（国登録有形文化財）を利用する『鎌倉文学館』、1891年築の旧第四高等学校本館（国指定重要文化財）の中にある『石川近代文学館』（金沢市）などである。これらは資料の閲覧と併せて、建物も観覧の対象となるであろう。

少し風変わりな「文学館」にも言及しておきたい。一つは、小樽商科大学附属図書館内にある、旧制小樽高商以来の校史に関わる史・資料を収蔵、展示している『小樽商科大学史料展示室』である。ここには、高商時代の卒業生である小林多喜二と伊藤整（二人は一学年違いで、ほぼ同時代に在学し、面識もあった）関係の資料が展示されている。もう一つは、『三菱重工長崎造船所資料館』である。三菱重工長崎造船所では、かつて戦艦武蔵（1942年竣工）が建造された。館には、それを題材にした吉村昭の小説『戦艦武蔵』（1966）に関わる資料が展示されている。両者とも、その場所の持つ「現場性」とでも言うべきものを感じ取りながら観覧できる施設である。

最後に、総合資料館として、全国の「文学館」の総元締め的存在であり、全国文学館協

議会の事務局も置かれている『日本近代文学館』（東京都目黒区）に触れておきたい。1963年に開館し、約120万点の資料を収蔵、主に研究者の利用に供しながら、企画展や各種講座も開催している。姉妹館とされる『神奈川近代文学館』（横浜市）も、総合資料館としての機能を果たしつつも、神奈川県に関わりが深いテーマでの企画展を継続的に開催し、広く観覧者を集めている。

おわりにー「文学館」の新たな動き

「文学館」を訪れるのは研究者や文学好きな人々を中心に、必ずしもその数は多くはない。殊に近年は、大学の文学関係学科の改組や廃止が相次いでいることにも象徴されるように、文学そのものが、以前よりも人々の日常から遠いものになり、その余波は「文学館」にも及んでいるようである。そのような状況の中で「文学館」の側からも新たな動きが起きている。

一つは、近代の文学者が主要なキャラクターとなって活躍するゲーム『文豪とアルケミスト』（2016年より配信）が多くの若い人たちの間に広まったことで、各地の「文学館」がコラボ・タイアップ企画を実施し、若い観覧者を飛躍的に増やしていることが挙げられる。

もう一つは、2022年11月から2023年1月にかけて、全国52か所の「文学館」や図書館等が共同・連携して、「萩原朔太郎大全2022」という大テーマの下での企画展を同時多発的に実施して話題を呼んだことである。

こうした動きが、一般の人々、特に若い人たちの文学への関心の喚起につながることを願ってやまない。

参考文献

- 東京新聞・中日新聞文化部『文学館のある旅103』集英社新書（2004）
- 中村稔『文学館を考える』青土社（2011）
- 『増補改訂版 全国文学館ガイド』小学館（2013）
- 『近代文学研究における〈資料〉の活用』日本近代文学会（2019）
- 朔太郎大全実行委員会編『萩原朔太郎大全』春陽堂書店（2022）
- 影山亮「文学館・記念館の役割」『昭和文学研究』第85集（2022）



Profile

創造的リベラルアーツセンター 特任教授

石井 洋二郎 (ISHII Yojiro)

東京大学法学部卒、同大学院人文科学研究科修士課程修了、博士（学術）。東京大学教養学部長、同理事・副学長を経て、2019年4月より中部大学教授、2021年4月より同創造的リベラルアーツセンター長、2022年4月より特任教授。専門はフランス文学・フランス思想。著書に『ロートレアモン 越境と創造』（芸術選奨文部科学大臣賞）、『時代を「写した」男ナダール』、共著に『大人になるためのリベラルアーツ』、編著に『リベラルアーツと外国語』、翻訳にブルデュエ『ディスタンクシオン』など。



文系の逆襲



はじめに

最近では気候変動や原子力発電の問題、さらにはAIの急速な進歩などをきっかけに、いわゆる「理系」の学者の口から「科学技術の暴走をコントロールするためには哲学や倫理学など、文系の学問も重要である」という言葉がしばしば出てくる。しかしこれはあくまでも社会を駆動しているのは理系の学問であり、文系の学問はそれを抑制したり補正したりするための補助的な役割を果たすものにすぎないという「無意識の理系中心主義」に基づいた言説にほかならない。本稿はこうした言説に対抗して、文系研究者の立場からささやかな「逆襲」を試みるものである。

学問分類の再構築

従来の学問分野は「人文・社会・自然」という3種類に分類され、人文科学と社会科学はひとまとめにして「文系」、自然科学は「理系」と呼ばれてきた。しかし英語で「人文科学」はhumanities、「社会科学」はsocial science、「自然科学」はnatural scienceであり、人文科学にはscienceという言葉は含まれていない。一方、心理学や認知行動学など、人間そのものを科学的に研究する学問を指す言葉としてはhuman science(人間科学)という用語がある。

となると、人間が作ったわけではない

natureを対象としたscienceがnatural science、人間が作ったsocietyを対象としたscienceがsocial science、そして人間そのものであるhuman beingを対象としたscienceがhuman scienceと、scienceを3種類に分けて「科学知」と呼び、これを「人文知」と対比させて整理したほうがわかりやすいのではないか。

この図に従えば、従来漠然と「文系」とさ

れてきた経済学は明確に「科学知」のカテゴリーに位置づけられるし、心理学も「人間科学」の一分野として、やはり「科学知」に属することになる。また、これまで「理系」であるがゆえに「自然科学」に分類されてきた医学やスポーツ健康科学なども、むしろ「人間科学」の範疇に属するものとして整理できる。

従来の学問分類

人文科学 humanities	人文 社会 科学	文系
社会科学 social science		
自然科学 natural science	理系	



組み替え後の学問分類

人文学 humanities	人文知
人間科学 human science	科学知
社会科学 social science	
自然科学 natural science	

短期的有用性と長期的有用性

「文系」の学問には、常に「何の役に立つのか」という問いが突き付けられるが、これに対しては「すぐ役に立つことはすぐ役に立たなくなる」という反論がなされることが多い。短期的有用性と長期的有用性は異なるという立場である。

確かに文系・理系を問わず、短期的・即時的に「役に立たない」学問であっても長期的な射程で見れば「役に立つ」分野はいくらでも存在する。これに関して、社会学者の古見俊哉はマックス・ウェーバーの「目的合理性」と「価値合理性」という概念を参照しつつ、「目的遂行型」の短期的有用性と「価値創造型」の長期的有用性を区別し、前者はおもに理系、後者はおもに文系の知に対応していると論じている。この二分法に則れば、「文系だって役に立つ、ただ役に立ち方が理系とは違うだけである」という議論が可能になるだろう。

しかし「文系だって役に立つ」という言い

方は、あくまでも「役に立つか立たないか」ということを価値基準として受け入れることが前提になっている。つまり相手と同じ「有用性」という土俵に立って押し返しているだけで、これでは本当の意味での逆襲にはならない。そうではなく、土俵そのものの正当性を問い直し、「有用性」というイデオロギーを「脱構築する」ことが必要なのではないか。

「文学研究」の場所

文学研究はそもそもなんらかの「有用性」に奉仕することを目指しているわけではないので、「文系だって役に立つ」という立場は主張できない。私の主たる研究対象はロートレアモンというマニアックなマイナー・ポエトだが、この詩人を研究することについて何の意味があるのか、5年後、10年後とはいわれないが、50年後、100年後に何か役に立つ見込みはあるのか、と正面から問われると、いや、たぶん何の役に立たないでしょう、と言って頭を下げるしかないであろう。

つまり私の研究は科学技術のように人類の進歩に貢献するわけではないし、政治学や経済学のように現代世界の課題解決に直結するわけでもない。そればかりか、同じ「人文学」に属する哲学や倫理学のように、人間の生き方に何らかの指針を与えるものでもない。したがって、目的遂行型の有用性はもとより、価値創造型の有用性も主張することは困難である。

となると、どちらでもない第3の型、つまり「有用性」の有無という物指しそれ自体からはみ出すような学問の根拠を見出さなければならぬことになる。いかなる有用性にも従属しない「学問のための学問」、あえて名付ければ「自立存在型」の学問である。

ここで私が強調したいのは、「人間は本質的に愚かな存在である」という命題である。ニーチェが『悲劇の誕生』で提示した有名な図式に従えば、調和と秩序を旨とするアポロ的な側面に対して、混沌や逸脱を体現するディオニソス的な側面を同時に内包している

のが人間である。人間は常に自分をはみ出してしまう過剰なものを抱えており、抑えようにも抑えきれない欲望の噴出にさらされながら、ノモスとカオス、ロゴスとピュシスの間を行ったり来たりしている不条理な存在であって、その判断や行動はおよそ合目的な最適化の原則には従わない。しかしこのどうしようもない非合理性、癒しがたい愚かさにごそ、人間の人間たるゆえんがあるという言い方もできる。

世界を動かす原理を「盲目的な意志」としてとらえたショーペンハウアーも、人間の奥深くに潜む「無意識」に光をあてたフロイトも、つまるところ規範から逸脱する存在としての人間に注目したという点で一つの系譜に連なっている。予定調和的ではない逸脱の連続、いわば「すれの連続」としての人間存在に焦点を当て、可能な限りすくいあげるのが、人文学の存在意義なのではないか。

「大きな物語」と「小さな物語」

フランスの思想家、フランソワ・リオタールは『ポスト・モダンの条件』（1979）において、近代社会がその文化的コンテクストを正当化し維持するための普遍的な世界観・人間観（科学による進歩、資本主義、民主主義、等々）を「大きな物語」と呼び、その終焉を告知した。文学研究は「人類の進歩」とか「世界の平和」といった理念に対しては、短期的にはもとより、中・長期的に見ても何の役に立たないかもしれないが、もしリオタールの言うように「大きな物語」が後退して「小さな物語」が散乱しているのが現状であるならば、そこに文学研究の場所を見出せるかもしれない。

現在は過去とは違った形での「大きな物語」が復活する兆しも見える。その一例がSDGsで、今では誰もがこれを自明の正義として唱導している。だが、これを無条件に絶対的な普遍的真理として受け入れてしまうと、人類は特定の「大きな物語」に呑み込まれてしまう危険があるのではないか。われわれはもっとマイクロな次元で日々を生きていて、そこに

はさまざまな差異や雑多な葛藤が渦巻いているのであり、世界は「小さな物語」にあふれている。だから全体よりも部分、同一性よりも差異に注目することが必要なのであり、それこそが「有用性」に奉仕するのではない「自立存在的」な学問、すなわち文学研究を始めとする人文学の役割であるように思われる。

「科学知」の基盤としての人文知

こう考えてみると、「人文知」をこれまで「人文学」と呼ばれてきた限定的な学問カテゴリーに閉じ込めて「科学知」と対立させるのではなく、人間のあらゆる知的な営みを貫く普遍的な基軸としてとらえたほうがいいのではないかという考えに達する（下図参照）。

人間科学 human science	社会科学 social science	自然科学 natural science
科学知 sciences		
人文知 humanities		

すべてのsciencesは「人文知」humanitiesの支えがあってはじめて成立するのであり、humanitiesもsciencesの支えがなければ意味をもたない。つまり両者は相互に支え合っており、表裏一体の「総合知」として一つに溶け合っている。「国際人間学」という研究科の英語名称はGlobal humanicsであるが、これはまさに以上のように「総合的・包括的」にhumanityの多様性＝humanitiesを研究する学問としての「総合人間学」を表すものとしてとらえるべきであろう。

参考・引用文献

- 石井洋二郎(編)『リベラルアーツと自然科学』(水声社、2023年)
 吉見俊哉『「文系学部廃止」の衝撃』(集英社新書、2016年)
 フランソワ・リオタール『ポスト・モダンの条件』(1979年、小林康夫訳、水声社、1989年)



Profile

国際人間学研究科 国際人間学研究科言語文化専攻 博士前期課程 1年
栞 啓鵬 (RAN Keihou)

1998年生まれ。2020年中国の西南科技大学を卒業。専攻は日本語日本文化コース、日本語教育。現在、中国語を母語とする日本語学習者を対象とした、複合動詞の習得研究について研究している。趣味はアニメ鑑賞、旅行。



中国人学習者における複合動詞の習得研究



はじめに

筆者は、日本語を学んでいた時、周りの学習者の複合動詞の使用頻度が低いことに気づいた。複合動詞を使うと単純動詞の場合より言語の表現力が豊かになって、複雑な事柄を表現できる。先行研究でも、母語話者と比べて、学習者は複合動詞の使用頻度が低いことが報告されている。

本研究は、中国語を母語とする日本語学習者を対象に複合動詞の使用状況と習得状況について調査するものである。

先行研究

複合動詞の研究には、分類研究、意味研究、量的調査がある。分類研究については、寺村(1969)、長嶋(1976)、山本(1984)の流れがある。寺村(1969)は、複合動詞になっても元の意味を保持されているかどうかの観点から四類型に分類した。長嶋(1976)は、前項動詞と後項動詞が複合動詞文そのものと、どのように結びつき得るかに着目し複合動詞を二類型に分類した。山本(1984)は、複合動詞の格成分が前項動詞または後項動詞とどのような対応を見せるかに着目して、その明示的基準により、四類型を分類した。長嶋の分類は、分類基準が明示された点で寺村を一步進めたものであると評価される一方で、他の類型について言及がな

いことも指摘されている。寺村が「意味的な観点」から分類したのに対し山本の研究は、「前項動詞と後項動詞の格支配がどのような形で関わり合っているのか」という「統語的な観点」から分類したものであり、一つの客観的基準が示されたという点で評価される。

意味研究では、姫野(1978)や松田(2002)の研究などがある。松田(2002)は、意味認知論を援用して、「～こむ」のコアスキーマをコア図式であらわし、「～こむ」の多様な意味の統一的な説明を試みた。「～こむ」の多義的で見えにくい意味構造を明らかにした。

量的調査としては陳(2007)がある。陳(2007)は、日本語学習者と母語話者を対象に両方の複合動詞の使用状況について量的調査を行った。KYコーパスと上村コーパスを利用して、学習者の発話データと母語話者の発話データから、複合動詞の使用状況を分析した。その結果、母語話者と比べて学習者による複合動詞の使用総文字数や使用率が少ない傾向があることを報告した。この他に苑、黄(1998)、邱、骆、陳(2004)、闫(2005)など中国語の複合動詞の研究で参考にする予定である。

研究課題と研究方法

本研究で明らかにする課題として、一つ目は中国人学習者の複合動詞の使用に関して、

書き言葉と話し言葉の特徴を明らかにすることである。二つ目に、質的調査から母語の影響を見ることである。複合動詞の使用について、母語はどのような役割を担っているのか調べることによって、将来日本語の複合動詞の教育に役立てることができる。

量的調査として、日本語学習者コーパス『多言語母語の日本語学習者横断コーパス(International Corpus of Japanese as a Second Language, 以下 I-JAS)』を使用する。

I-JASを使って、中国人を母語とする学習者の複合動詞の使用状況を調査し、書き言葉と話し言葉の使用頻度で上位を占める語彙15リストを作って比較する。質的調査では、中国語母語日本語学習者に対して、4コママンガを用いた課題と穴埋め問題を使って複合動詞の知識に関する調査をする予定である。

引用文献

- (1) 陳曦(2007)『日本語科学』22, 79-99, 国書刊行会
- (2) 寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
- (3) 長嶋善郎(1976)「複合動詞の構造」『日本語講座4日本語の語彙と表現』大修館書店 63-104
- (4) 松田文子(2002)『言語文化と日本語教育』2002年5月特集号 170-184.
- (5) 姫野昌子(1978a)「複合動詞『～こむ』、および内部移動を表す複合動詞類」『日本語学校論集』5, 東京外国語大学 47-70.
- (6) 山本清隆(1984)「複合動詞の格支配」『都大論究』21, 32-49. 陳曦(2007)『日本語科学』22, 79-99, 国書刊行会



Profile

国際人間学研究科 言語文化専攻 博士前期課程 1年

坂本 堇 (SAKAMOTO Sumire)

2000 石川県金沢市年生まれ。2022年4月に国際人間学研究科言語文化専攻に進学。その土地ごとの環境音を四六時中録音することで、「まち」を「音」でアーカイブできないかと考えている。現在は、収集した音データにメタデータを付与する作業を行いつつ、音響学やバイノーラル録音といった研究に関連する学問と格闘中。



サウンドスケープデザイン支援を目指した 音資源デジタルアーカイブシステムの開発



はじめにBGMがあった

古来より「鐘の音がよく聞こえると雨」という。遠くの鐘の音が聞こえるときは雨が降りやすいという意味で、気象条件と音の伝播について指摘した諺である。

BGMやSEは様々なエンタテインメントコンテンツや、場所の雰囲気向上させるために、昔から制作、消費され続けている。一つの職種としてサウンドデザイナーも存在し、環境に合わせて繊細な調整を行っている。それこそ、気象条件に合わせて音の響きを調整している。

そして、2000年代にはYouTubeの浸透で、素人が動画を作成できるようになり、汎用的なBGMとSEが使われることが目立つようになった。YGMの時代になって、調整されていない音が、そのまま使われるようになってきたのだ。

VR環境と生活様式の変化

近年VR環境の発展が目覚ましい。2000年代まではVR用のコンテンツを行う際に必要な環境が、大掛かりでコストがかかるため、テーマパークなどで運用されてきた。しかし、近年は家庭用の機器も出現し、そのコンテンツの数は増加している。とくに、2016年に入るとOculus社が発売したVRヘッドセットRiftを皮切りに、家庭用VRヘッドマウントディスプレイが多数発売された。家庭用VRヘッドマウントディスプレイは、それま

でのVRに必要な環境に比べ小型で安価であるため、VR触れる人口が増え、VR上でのコンテンツ量の増加、および消費が激しくなった。

また、2020年から全世界的に感染爆発を起こした新型コロナウイルスによって、これまでの生活様式から一変してしまった。その影響から、仮想空間上で社会活動や、円滑なコミュニケーションを行う支援システムの発展が社会的課題となり、いわゆる「メタバース」について研究や議論が盛んに行われるようになった。

解説

みなさんはコンテンツの中で「目に写っている状況」と乖離した「音」が流れていた経験はないだろうか。この状況を解説するにあたって「サウンドスケープ」概念が重要になってくる。

サウンドスケープとは、1960年代にR.マリー・シェーファが提唱した「風景には音が欠かせなく、自然の音として聞こえてくる音には聞き手側の認識も含まれている」という概念のことである。現在では「コンテンツ内、全ての音のこと」を指していることが多い。

現在まで「目に写っている状況」と「音」の違和感を解決するために、その状況に合わせた音が一から作られてきた。だが、将来には、VRを使用するコンテンツが音を詳細に作り込む程、コストをかけられるものではなくると筆者は考えている。その際に、プロ

グラムが使うデジタルアーカイブがあっても良いのではないかと考えた。

プログラムが使うデジタルアーカイブ

本研究では必要となる音を無作為に蓄積し、その音に関するメタデータを整備することで必要な音を探し出すことを目的とする。環境音に特化した音資源デジタルアーカイブがあれば、コストをかけずにコンテンツに沿ったサウンドスケープを選択することが可能になる。人の手によるサウンドデザインを経ずにサウンドスケープを利用できるようにすることが、本研究の目的である。

システム概要



図1 システム概要図

現在、機械が利活用するための環境音を稚内や那覇で収集しており、今後、デジタルアーカイブ化したのち、実験していく予定である。

引用文献

R.マリー・シェーファ、鳥越けい子訳「世界の調律」平凡社 2006



Profile

国際人間学研究科 言語文化専攻 博士後期課程 1年

原 由美子 (HARA Yumiko)

愛知教育大学大学院教育学研究科英語教育専攻課程修了（教育学修士）。修了後は英語圏文学文化研究、主にアイルランド文芸復興時のアングロ＝アイリッシュ文学を対象とした研究を行う。近年はコメディカルの専攻学生に向けた英語学習教材の開発に従事。



ナラティブ・メディスンにおける英語文学作品の精読活動 —その解釈作業と期待される教育効果について—



「ナラティブ・メディスン」とは

ナラティブ・メディスンとは「物語を取り入れた医学」という意味で、医学の分野で展開される治療や患者コミュニケーションの一要素としてナラティブ、つまり物語や語りの解釈に関係するアプローチを取り入れる方法を指す。人文学の導入による医学の向上を目的としている。

本研究の目的

本研究の根本的問いは「文学は如何にして医学に寄与できるか」というものであり、この問いについてナラティブ・メディスンの関係者がさまざまな見解を述べている。本研究では、日本の高等教育における医療系分野専攻の学生を念頭に置き、教養課程の英語教育の範疇を想定したナラティブ・メディスンのためのテキスト解釈法の提示を試みる。

本研究の背景—「文学と医学」

ナラティブ・ターンとは、それまで科学的根拠に主眼においていた人間科学の分野において1990年前後に分野横断的にナラティブへの関心が高まり、それを研究方法や治療の中心に据える流れが広まった、その現象を指す。

先行研究によると、例えば米国における医学分野のナラティブ・ターンは「文学と医学」の関係性の上に発生したと位置付けることができる。そして医学の分野に先立ってその数十年の間に人間科学の分野全般で起こったナラティブ・ターンを反映し、医療人を育成するための医学教育の焦点が「文学」よりも「ナラティブ」にシフトして行ったため、医学における「ナラティブ」とはある意味で当初は文学の意味、ないしは文学と同義の性質を内包していたと言える。

このような米国における「文学と医学」の協働の歴史を踏まえ、本研究ではナラティブ・メディスンの立場から文学作品を解釈するための方法論として作品精読の具体例を示し、日本における医療系分野専攻の学生を対象とした英文学作品の精読活動のためのスキームを提示する。

研究計画

1. 「ナラティブ」という諸分野において異なる定義を有する用語の歴史的背景に関し、「文学と医学」を中心に整理を行う
2. ナラティブ・メディスンのための「精読」のアプローチ方法を提示する
3. 具体的な文学作品を用いた文学研究アプローチに基づくナラティブ・メディスンのための読みの事例提示を行う

4. ヘルスケア関連を学ぶ日本人学生を対象にした英文学作品の精読活動の実践（文学作品受容のあり様について分析、考察）

今後の研究活動

ナラティブ・メディスンにおいて、精読によって向上する能力として指摘されているのは、Ⅰ) 患者に対する想像力を養う、Ⅱ) 患者に対する共感を深める、Ⅲ) 臨床における倫理的特質への気づきを高める、Ⅳ) 患者への気づきの範囲を広げるといったものである。これらの能力の涵養のため、文学理論に則った解釈と医学の視点を交えて論じた例を比較し、ナラティブ・メディスンのための文学作品の読みについての事例提示を試みる。

参考文献

- Charon, R. (2000). Reading, writing, and doctoring: Literature and medicine. *The American Journal of the Medical Sciences*, 319(5), 286.
- Caron R. (2006). *Narrative medicine, honoring the stories of illness*. NY: Oxford UP.
- Charon, R. et al. (2017). *The principles and practice of narrative medicine*. Oxford UP.
- Hunter, K. M. (1991). *Doctors' stories: the narrative structure of medical knowledge*. Princeton NJ: Princeton University Press.
- Jones, A. H. (2013). Why teach literature and medicine? Answers from three decades. *The Journal of Medical Humanities*, 34, 421.

第17回「院生の力」を開催

第17回「院生の力」研究報告会が2022年11月2日に開催された。院生が日頃、どのようなテーマに関心を持ち、どのような研究に取り組んでいるかを多くの方に知ってもらうのが主な目的である。また、指導教授がコメンテーターとして議論に参加する形式をとり、院生の研究能力を高める場としても位置づけられている。

今回は2022年4月に言語文化専攻に進学した博士前期課程2名、博士後期課程1名、計3名の院生が発表をおこなった。同じ言語文化専攻であってもテーマが多岐にわたり、いずれも興味深い発表であり、これからの研究の進展を大いに期待させる内容であった。質疑応答も活発になされ、たいへん盛り多い報告会となった。参加者は発表学生を入れて学生6名、教員10名、事務員3名の計19名。



CHUBU UNIVERSITY

大学院国際人間学研究所 主催
第17回院生研究報告会

大学院生が一般聴衆向けにわかりやすく研究内容を発表します。
どなたでも参加自由ですので、ぜひ聞きにいらしてください。
特に学部学生を歓迎します！

院生の力

・ 日時 2022年11月2日 (水)
15:20-16:50

・ 場所 2522講義室 (25号館2階)

言語文化専攻 博士前期課程1年 ラン・ケイホウ
「中国人学習者における複合動詞の習得研究」
コメンテーター：小森 早江子 教授

◆

言語文化専攻 博士前期課程1年 坂本 董
「サウンドスケープデザイン支援を目指した音資源デジタルアーカイブシステムの開発」
コメンテーター：橋 和祐 准教授

◆

言語文化専攻 博士後期課程1年 原 由美子
「ナラティブ・メディスンにおける文学作品の解釈作業の過程とその効果について」
コメンテーター：西村 智 教授

第18回教員研究会を開催

第18回教員研究会が2022年11月30日に対面形式で開催された。発表者は言語文化専攻の杉本和弘教授と、創造的リベラルアーツセンター長(前国際人間学研究所長)の石井洋二郎特任教授の2名である。

杉本教授からはこれまでに訪れられた数多くの「文学館」(主に近代文学関係)の中からいくつかを取り上げ、「文学館」の特色や魅力をお話いただいた。「文学館」の多様な楽しみ方や新たな動きにも触れられ、すぐにでも「文学館」に行きたくなるような、たいへん聴衆の興味を引き付ける内容であった。石井特任教授は「文系の逆襲」という刺激的なタイトルで、「無意識の理系中心主義」に対する文系研究者の立場からの逆襲を試みられた。学問分類の再構築や人文学の存在意義、さらに「科学知」の基盤として「人文知」を捉える考え方、総合人間学としての本研究科のあり方など、たいへん有益で示唆に富む内容であった。

限られた時間ではあったが、たいへん活発な質疑応答がおこなわれ、充実した教員研究会となった。参加者は発表者2名を入れて教員31名、事務員2名の計33名。



中部大学国際人間学研究所 主催

第18回 教員研究会

2022年11月30日(水)

研究科委員会終了後(17:45頃～)

2545 講義室 (25号館4階)

杉本 和弘 教授 (言語文化専攻)
「文学館」をめぐる

石井洋二郎 特任教授 (創造的リベラルアーツセンター)
文系の逆襲

院生・学部生の来聴を歓迎します。

中部大学国際人間学研究科

国際関係学、言語文化、心理学、歴史学・地理学の各専攻からなる国際人間学研究科は、人文系諸科学と社会系諸科学に架橋をかけて、人間と文化、民族と国家の研究のフロンティアを拡大し、グローバルな諸問題に挑戦できる知的創造的研究、および、さまざまな現場から広く社会貢献を目指した実践的研究ができる人間を育成し、研究成果を通して社会に貢献することを教育研究上の目的としています。

国際関係学専攻

科目【博士前期課程】

国際政治経済研究コース

政治経済研究特論/国際法特論/国際政治学特論/国際経済学特論/国際機構論/国際金融論/国際協力論/開発経済学特論/国際公共政策特論/発展途上国論/社会開発特論

国際社会文化研究コース

社会文化研究特論/文化人類学特論/国際社会学特論/国際ジェンダー論/比較文明論/比較環境論/比較社会論/比較宗教論/地域社会文化研究特論

共通科目

研究方法論/臨地研究論/近代世界表象体系/海外文献研究

特別研究

研究指導

研究科共通

日本語論文の書き方

科目【博士後期課程】

国際政治経済学専門研究演習

国際社会文化論専門研究演習

心理学専攻

科目【博士前期課程】

心理学科目群

心理学研究法特論/知覚心理学特論/健康心理学特論

学校心理学科目群

認知心理学特論/社会心理学特論/発達心理学特論/臨床心理学特論/教育心理学特論/学習指導法特論/学校教育特論/障害児心理学特論/生徒指導特論/心理検査法特論/学校カウンセリング特論/教育統計学特論

特別研究

研究指導/課題指導

研究科共通

日本語論文の書き方

科目【博士後期課程】

学習心理学専門研究/教育心理学専門研究/認知心理学専門研究/臨床心理学専門研究

言語文化専攻

科目【博士前期課程】

ジャーナリズムコース

研究基礎(情報収集、メディア・クリティシズム)/現代国家・制度特論/現代史特論/情報産業・流通特論/現代社会特論/社会心理学特論/情報技術とメディア特論/ジャーナリズムと倫理特論/現代の広報特論/報道記事作成技法/ドキュメンタリー作成技法/プロジェクト/研究指導

英語圏言語文化コース

応用言語学特論/英語教育法特論/英語学特論/英米文学特論/英語圏言語文化総論/研究指導

日本語日本文化コース

日本語学特論/日本語教育学特論/古典文学特論/近代文学特論/日本文化特論/伝承文芸特論/日本芸能特論/国語教育特論/研究指導

共通科目

近代世界表象体系

研究科共通

日本語論文の書き方

科目【博士後期課程】

メディア・コミュニケーション専門研究

英語圏言語文化専門研究

日本語文化専門研究

歴史学・地理学専攻

科目【博士前期課程】

歴史学コース

日本古代史特論/日本中世史特論/日本近世史特論/日本近代史特論/日本現代史特論/アジア史特論/中国史特論/ヨーロッパ史特論/アメリカ史特論/社会経済史特論/思想史特論/文化史特論/技術史特論/美術史特論/歴史学研究

地理学コース

経済地理学特論/歴史地理学特論/都市地理学特論/地理情報学特論/都市政策学特論/自然地理学特論/地誌学特論/地理学研究

共通科目

近代世界表象体系

特別研究

研究指導

研究科共通

日本語論文の書き方

科目【博士後期課程】

歴史学専門研究演習

地理学専門研究演習

- 発行：中部大学大学院国際人間学研究科
- 編集者：大塚俊幸
- 発行日：2023年2月24日
- 〒487-8501 愛知県春日井市松本町1200
- 中部大学国際人間学研究科(人文学部事務室)

- 電話：0568-51-4144(直通)
- ファクス：0568-52-0622
- 電子メール：inkn@office.chubu.ac.jp
- 国際人間学研究科ホームページ：
<https://www.chubu.ac.jp/academics/graduate-global-humanics/>